平成２６年１１月２８日(金)

老球の細道８６号

「クリエイテイブに」

会津バスケットボール協会理事長　室　井　冨　仁

民俗学者梅棹忠夫氏のロングセラー本に『知的生産の技術』という著書がある。今から４０年くらい前に出た本であるが、現在でも知的生産のノウハウを得るための種本として静かなブームが続いている。私は教員に成り立ての頃、バスケットボールの面白い練習方法を作成するためと保健体育の授業のアイデイアのためにこの本を貪るように読んだことがある。今でもこの本から得たノウハウがバスケットボールや保健体育授業のみならず、あらゆる場面での創意工夫に役立った。

梅棹さんは高校生の頃に、レオナルド・ダ・ウインチを主人公にしたした小説『神々の復活』を読んだ。その中で、梅棹さんが鮮明に覚えていたのが、ダ・ウインチがポケットに手帳を持っていて、気がつくと何でも書き込むという奇妙なクセ。天才ダ・ウインチはこれらのメモから新たな作品のアイデイアを考えていた。これを知って以来、梅棹さんは、天才に少しでも近づくために手帳をつけるようになったという。ただし、梅棹さんが強調するのは、手帳を持つということではなく、そこに記録する内容についてである。その内容とは、毎日の暮らしでの「発見」を記すということ。発見とは、「これは面白いと思った現象」であったり、「自分の気づき」などである。

私も梅棹氏のこの本を読んでからはどこに行くのにもセカンドバックに手帳と筆記用具を持参するようになった。何か発見したり、ひらめいたりしたときに忘れずメモするためである。かつてはトイレの中にまでメモ用紙とペンを置いたり、飲み屋にまで筆記用具持参ではせ参じたこともあった。最近は、排便する時と酔う時はそれに集中しようということで断念している。

面白いことやアイデイアの原点になる「気づき」を自分のアンテナが受信するためには、自分自身の心のあり方が必要である。リンゴが木から落ちるのを見て何も感じない人と万有引力の法則をひらめく人がいる。同じ情報でも受信する人と受信しない人がいることでもわかるだろう。

何気ない情報から面白いアイデイアを創造するためにの心のあり方とはどんなことだろう。私がたどりついた結論は三つの心。キーワードは「　」「？」「！」。

一つは「　」。先入観にとらわれない真っ白な心（ミラーマン）。何でも受け入れる心の広さが今までの自分の殻を破る新たな発想を産み出すことがある。

二つは「？」。何でだろうと常に疑問を持ってとらえる（ギモンマン）。日頃当たり前だと思われていたこと、思われてきたことでも、「なぜか？」とクエスチョンマークで考え直して見ると新たな発見ができる。

三つ目は「！」。当たり前のことでも驚きの気持ち、感動の気持ちで考える（オドロキマン）。冷めていては心の中の化学反応は起こらない。チャップリン曰く「面白くない映画など何一つない。面白くない見方はたくさんある」。

何もないところから新しいアイデイアは産まれない。今ある古いことの中からたくさんの良さを発見し、そこに色々な工夫を加えることによって新しいものが産み出される。クリエイテイブ活動も温故知新なのである。我らのバスケットボールもそうして創られた。